



第3回

丹波育児院

～辻原光治とその周辺の人々～

辻原光治の家族構成

大正九年（一九二〇）十月一日、日本初の国勢調査が行われました。そのときの記録『国勢調査控』が残っています。それによると当時の辻原光治家の家族構成は次の通りでした。

- 辻原光治 主人(46歳)
明治七年三月六日
やめ 妻(34歳)
明治一九年二月一日
富 長女(17歳)
明治三六年三月一六日
春 二女(15歳)
明治三八年二月一四日
次郎 長男(13歳)
明治四〇年三月一七日
梅 四女(9歳)
明治四四年五月一四日
三郎 二男(7歳)
大正二年七月二日
清之丞 父(74歳)

- 弘化三年二月二日
げん 母(64歳)
安政三年四月七日
四郎 三男(4歳)
大正五年五月二七日
花 五女(1歳)
大正八年六月六日

以上のように光治夫妻と三男四女、両親という一一家族でした。長男次郎、次男三郎、三男四郎という命名や、娘たちの名前に独自のものを感じます。この家族に加えて孤児たちを養育していたのです。

ルーツは「山内氏」

辻原光治家は、江戸時代初期の延宝六年（一六七八）に辻原傳右衛門正家が辻原澤太郎から分家したことに始まるとされています（『現代船井郡人物史』）。
本家と考えられるのは、現在京丹波町三ノ宮高尾に

存在する辻原百合子家です。百合子氏の祖父も「澤太郎」でしたから、代々この名前を襲名していたのかもしれない。当家は古くから「本家」とされてきました。

三ノ宮高尾は別名「花ノ木」とも呼ばれ、花ノ木川下流域で、水呑西田の南に隣接しています。光治宅の西田一八番地からこの辻原家までは数百坪の距離です。辻原氏は古くは「山内」を称しており、中世の土豪山内氏につながる系譜を伝えています。のちの土佐藩主山内氏の先祖につながるともいわれる山内氏です。



父・辻原清之丞

裕福な村役人の家筋

光治は初代傳右衛門正家から数えて十代目とされています。光治の四代前（曾祖父）に生糸製造を始め、祖父の清助もこれに従事し、父清之丞（一八四六〜一九二〇）になって中止したようです。父清之丞は、「公事に尽くし、殊に奉公の心が厚い」人だったとされ、あるとき金八十両（米価で換算すると現在の四百万円以上か？）を領主に献上しました。これに対して領主から褒美として清之丞に毎年「米五俵」が明治四年まで与えられ、父清助には「紬の羽織一反」が下賜されています。その決定文書が伝わっています。

丹波御領分水呑村年寄
米五俵 清之丞
右年来律儀農業相励、御恩沢の程厚相弁へ殊に父清

助兼々申付を相守少高の身分累年心掛貯置候金子

八拾両為冥加上金願出候心底父子稀なり奇特の志一段の事依て以出格訳其方一代年々書面の通被下也別段父清助へ紬羽織地一反被下也(以下略)

水呑村は、江戸時代の大半を通じて上総国(千葉県)鶴牧藩水野氏と旗本河野氏の二人の領地でした。鶴牧藩は、上総と丹波に領地を持つ一万六千石の大名で、丹波では水上郡和田村(丹波篠山市山南町)に代官所を置いていました。この文書は「丹波御領分」とあることから、鶴牧藩が下したものとされます。

この文書からは清之丞が村の年寄役を務めていたこともわかります。年寄は庄屋の補佐役です。

育児院創業までの経歴

育児院創業に至るまでの辻原光治の経歴は『現代船井郡人物史』によって知ることができ、(太字部分)
・明治一九年(一八八六)三月に小学校卒業(12歳)。二十一年(一八八七)二月から二十二年(一八九〇)五月まで檜山村中尾喜太郎に普通学を学ぶ(13〜16歳)

小学校は四年制の時代です。中尾喜太郎は檜山尋常小学校の「首席教員」でしたが、明治二五年の役場文書には「訓導中尾喜太郎依願免職ス」と見えます。大正六年の村会議員当選者の中にも名前があります(『檜山村誌』)。「普通学」の内容はよくわかりません。

・二三年六月から二六年(一八九三)一二月まで蚕糸業技術習得のため下和知村新生

社に入社(16〜19歳)

新生社については、明治二五年の『府農会報』に「船井郡北部に於ける新生社等」は共同事業として(中略)、(生糸を)横浜に輸出している」と見えます(『和知町誌』)。
・三十年(一八九七)五月、五ヶ庄村五ヶ庄製糸合資会社に支配人兼技手として就職(23歳)

五ヶ庄村は現在の南丹市日吉町の北東部です。会社の詳細はわかりません。
・三一年(一八八八)二月から一二月まで府蚕糸業組合立蚕糸業講習所(綾部市)入所(24歳)

府蚕糸業講習所は明治二六年に設立された指導者養成機関で、初代所長は波多野鶴吉でした。その後何度かの改編を経て現在の府立綾部高校につなが

っています。

・三二年(一八九九)から三四年(一九〇一)三月まで船井郡蚕糸同業組合技手兼教師の囑託を受く(25〜27歳)。
三三年(一九〇〇)一月に大阪簿記学校にて簿記修得
船井郡蚕糸同業組合は二年(一八八八)発足。最初の事務所は須知村で、組合長は明田重次郎(初代須知村長明田吉五郎の実弟)でした。

生糸は、幕末の開港以来、昭和戦前期まで長く総輸出額の首位を占めたほど輸出産業として発展しました。当時綾部は「桑都」と称され、明治二九年には波多野鶴吉により郡製糸(株)(現・グンゼ(株))が設立されています。

船井郡でも二十年代に繭生産量は急増し、上和知・下和知・三ノ宮村などが主要な生産地となりました。

辻原は二七歳で船井郡蚕糸同業組合を退職、三二歳で育児院を創業するまでの五年間、「自宅に於いて山野開墾桑樹栽培に従事」して

いました。この間に伴侶を得、明治三六年に長女、三八年に次女をもうけ、四十年三月には長男が誕生、その三か月後に育児院創業となります。創業後の四一年九月には「内務省主催の全国感化救済事業講習会(東京)に入り十月修了」ともあります。

以上のように辻原は、学業を終えた後約十年間蚕糸業界に身を置き、やがて三二歳で畢生の事業というべき育児院を創業します。そのきっかけは何だったのか、どんな思いがあったのか、辻原の実像に迫っていきたいと思います。(山下幾雄)